

榛原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1993年度

榛原町文化財調査概要 12

1994

榛原町教育委員会

榛原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1993年度

榛原町文化財調査概要 12

1994

榛原町教育委員会

例 言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡榛原町内に所在する埋蔵文化財の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要 12）である。
- 2 調査は、1993年度（平成5年度）に受託事業・町事業として榛原町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を収録したものである。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会の指導及び各事業者の協力のもと榛原町教育委員会 技師 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、各本文中に詳しい。
- 5 各遺跡の調査記録、遺物等は榛原町教育委員会において保管している。
- 6 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

目 次

I	埋蔵文化財発掘調査の概要	1
II	位置と環境	3
	1 地理的環境	
	2 歴史的環境	
III	岩尾火葬墓隣接地発掘調査概要	7
	1 調査の契機と経過 (1) 調査史抄 (2) 調査の契機と経過 (3) 現地調査日誌抄	
	2 位置と環境	
	3 遺跡の調査 (1) 調査区と基本層序 (2) 検出遺構 (3) 出土遺物	
	4 まとめ	
	5 抄録	
IV	籾染向山古墳群発掘調査概要	13
	1 調査の契機と経過	
	2 位置と環境	
	3 遺跡の調査	
	4 まとめ	
	5 抄録	
V	桧牧遺跡第3次発掘調査概要	17
	1 調査の契機と経過	
	2 位置と環境	
	3 遺跡の調査	
	4 まとめ	
	5 抄録	
VI	山辺三マルズカ遺跡発掘調査概要	20
	1 調査の契機と経過 (1) 調査の契機と経過 (2) 現地調査日誌抄	
	2 位置と環境	
	3 遺跡の調査 (1) 調査区と基本層序 (2) 検出遺構 (3) 出土遺物	
	4 まとめ	
	5 抄録	
VII	丹切遺跡第5次発掘調査概要	26
	1 調査の契機と経過 (1) 調査の契機と経過 (2) 現地調査日誌抄	
	2 位置と環境	
	3 遺跡の調査 (1) 調査区と基本層序 (2) 検出遺構 (3) 出土遺物	
	4 まとめ	
	5 抄録	

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われている。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、これに伴う埋蔵文化財の取り扱い等について協議を重ねているところである。1993年度（平成5年度）までに榛原町教育委員会が扱った発掘届・通知、発掘調査等は表1のとおりである。

1993年度（平成5年度）に実施した発掘調査等のうち、本書には受託事業及び町事業として実施した岩尾火葬墓隣接地、篠栗向山古墳群、松牧遺跡、山辺三マルズカ遺跡、丹切遺跡の各発掘調査概要を収録している。

表1 発掘届・発掘調査件数等一覧表

概要	年度										
	1984 昭和 59	1985 昭和 60	1986 昭和 61	1987 昭和 62	1988 昭和 63	1989 平成 元	1990 平成 2	1991 平成 3	1992 平成 4	1993 平成 5	
発掘届（法57-2）	0	0	0	3	2	0	4	4	11	3	
発掘通知（法57-3）	3	3	3	6	13	6	9	4	7	7	
発掘届・通知合計	3	3	3	9	15	6	13	8	18	10	
遺跡踏査願	4	5	5	1	4	3	4	2	2	2	
発掘調査 （町教育委員会担当）	2	4	4	4	4	3	7	7	6	8	
立会調査 （町教育委員会担当）	0	0	0	2	3	1	0	0	3	1	
測量・調査 （町教育委員会担当）	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	
調査件数合計	2	4	4	6	7	4	7	8	10	9	



写真1 山辺三マルズカ遺跡隣接地の地藏石仏

表2 1993(平成5)年度発掘調査等一覧表

番号	所在地 (発掘調査地)調査号	遺跡名	調査地	発掘調査期間	調査機関 (発掘者)	調査面積	調査内容	調査結果	遺跡概要	備考
1	発掘調査 1-15 13-D-34	岩城火葬場 埋設場 2741-144	東京都板橋区 2741-144	1993・5・12～ 1993・5・25	無形建築設計工事 (有限セムラー 電話株式会社)	59	なし	磁石(近代?)1点	奈良時代の埋蔵品発掘 本報告	
2	発掘調査 2-212 2-220 15-B-91 15-B-92	鎌倉山古墳群 41-1地	神奈川県 41-1地	1993・6・22～ 1993・10・31	農産造成工事 (大宇代町)	820	1号墳-円墳、新竹形木棺1 2号墳-円墳、新竹形木棺1 3号墳-円墳、新竹形木棺1 7号墳-円墳、新竹形木棺1 8号墳-円墳、新竹形木棺1 9号墳-円墳、新竹形木棺1	1号墳-須磨系、土師器、新 竹形木棺、弥生土器 2号墳-須磨系、土師器、新 竹形木棺、弥生土器 3号墳-須磨系、土師器、新 竹形木棺、弥生土器 7号墳-須磨系、土師器、新 竹形木棺、弥生土器 8号墳-須磨系、土師器、新 竹形木棺、弥生土器 9号墳-須磨系、土師器、新 竹形木棺、弥生土器	5世紀後半～ 6世紀前半の古墳群 (11基) 1994年 一環状掘削調査予定	
3	発掘調査 3-46 100-46	松林遺跡 (第3次調査) 2107-4	東京都板橋区 2107-4	1993・9・20～ 1994・1・15	公園造成工事 (株 東 町)	800	土師、ビット、石列地	サヌカイ、弥生土器、須磨 系、土師器、瓦器、新竹形 木棺	縄文時代～中世の遺物 散布地 1994年 継続調査予定	
4	発掘調査 (未発表)	山辺三 マルスの遺跡 317・323	東京都山辺三 317・323	1993・9・24～ 1993・9・30	公園造成工事 (株 京 町)	153	なし	サヌカイ、弥生土器、須磨 系、土師器、瓦器	弥生時代、古墳時代、本報告 中世の遺物散布地	
5	発掘調査 4-5 (未発表)	自明原田遺跡 3156	東京都板橋区 3156	1993・11・15	農地造成工事 (個 人)	12	なし	なし	縄文時代、中世の遺物 散布地	
6	発掘調査 2-546 19-D-90	下妻・高尾遺跡 (第2次調査) 1994・3・18	東京都板橋区 1994・3・18	1994・1・15～ 1994・3・18	農地造成工事 (個 人)	160	礎石建物跡、掘立柱建物跡、 土坑、ビット、溝	サヌカイ、須磨系、瓦器、 土師器、新竹形木棺、弥生 土器、新竹形木棺、弥生土 器、新竹形木棺、弥生土器	縄文時代、弥生時代、1994年 継続調査予定	
7	発掘調査 1-90 10-B-8	月刈遺跡 (第5次調査) 45-1、47	東京都板橋区 45-1、47	1994・2・14～ 1994・2・28	公園造成工事 (株 東 町)	70	なし	須磨系、黒色土器、土師器	縄文時代～中世の遺物 散布地 本報告	
8	発掘調査 1-18 12-D-6	南山古墳 (第2次調査) 1994・3・29	東京都板橋区 1994・3・29	1994・3・24～ 1994・3・29	公園造成工事 (株 京 町)	27	掘立礎石	須磨系、土師器	飛鳥時代(7世紀)の1994年 継続調査 本報告	
9	発掘調査 4-23 100-3	八雲以東遺跡 1125ほか13遺	東京都板橋区 1125ほか13遺	1994・3・4	農地造成工事 (個 人)	なし	なし	なし	縄文時代～中世の遺物 散布地 本報告	

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大字陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300～400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも総称され、大字陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域的主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約400～800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香静山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大字陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。



図1 榛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では3点の有舌尖頭器が出土しており、うち、2点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、旧石器時代末期から縄文草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出上しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北山遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰口前遺跡、高田垣内遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や壑穴式住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期になると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山・篠楽古墳群、丹切古墳群、などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、工申の乱で活躍した将軍のひとりでも渡米系氏族でもある文祿麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には宇陀においても荘園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峠遺跡、八咫鳥遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

(参考文献等省略)

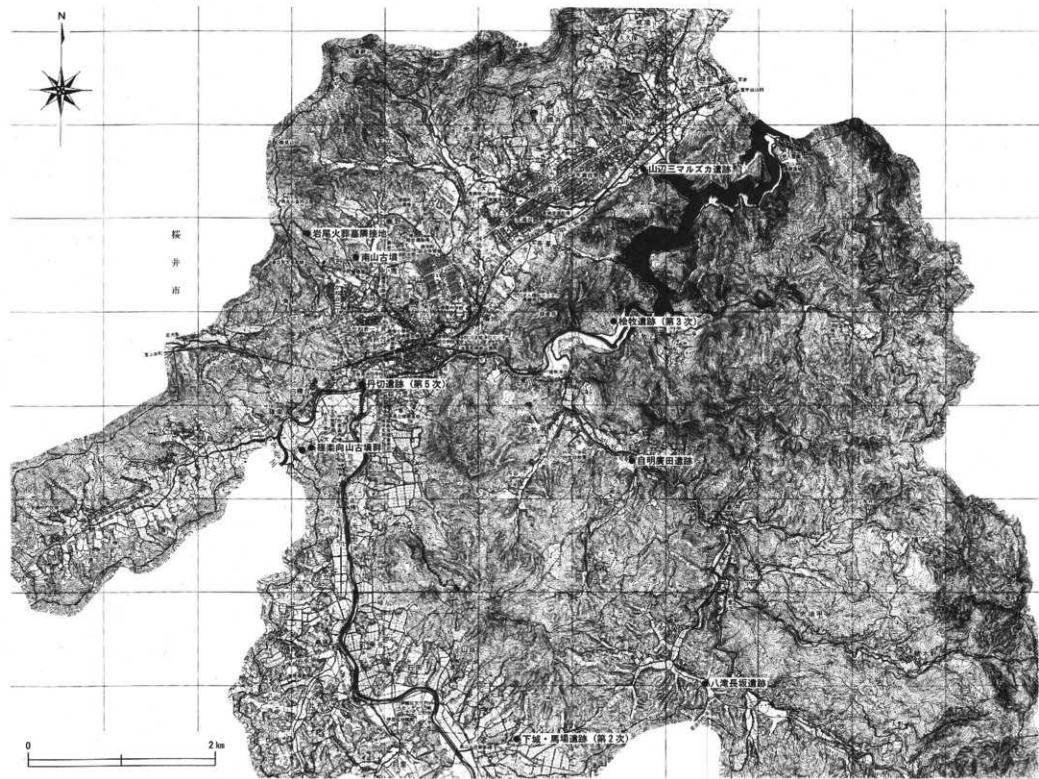


图2 調査位置图

Ⅲ 岩尾火葬墓隣接地発掘調査概要

1 調査の契機と経過

(1) 調査史抄

1914年（大正3年）12月、榛原町萩原の町並から烏見山へと至る山道で、偶然、2枚の鉄板が露出していたため、さらに掘っていくと、多量の木炭とこれに包まれた骨壺（須恵器）が発見され、骨壺内には火葬骨が納められていたという。この時の状況は森本六爾氏によって⁹¹⁾がなされている。鉄板は墓誌の可能性も考えられるが判然としない。これらの出土品は、東京国立博物館に収蔵されている。現在、その正確な出土地点は明らかでないものの「岩尾火葬墓」と呼称し、榛原町遺跡分布地図番号1-5として⁹²⁾記載している平安時代初頭の火葬墓である。

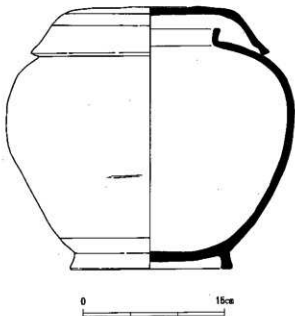


図3 岩尾火葬墓出土遺物（須恵器）実測図

(2) 調査の契機と経過

上記のような状況のもと、烏見山の中腹において、関西セラー電話株式会社によって無線鉄塔及び機械室の建設工事が計画された。この事業予定地内には、先述の岩尾火葬墓が位置することも推定されることから、事業者から平成5年（1993年）3月15日付けで「埋蔵文化財発掘届」が提出され、関係機関等が遺跡の取り扱い及び発掘調査の実施方法等について協議を行ったところ、受託事業として榛原町教育委員会がこれを行うことになった。発掘調査に伴う事務手続き等を経たのち、現地調査は1993年5月12日に着手し、同年5月25日に終了した。なお、後述のとおり、墳墓の本体を確認できなかったため、遺跡名は、「岩尾火葬墓隣接地」とした。

調査関係者は、次のとおりである。

調査主体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘）

調査担当課 榛原町教育委員会 社会教育課 (課長 奥田信雄)
 調査担当者 榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏
 調査補助員 井上好美、山本美恵子、梶本剛司、松田美幸、松田雄
 調査作業員 池田圭子、柳沢雅子

調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課

調査協力 関西セルラー電話株式会社、山下長之、大門恒夫

(3) 現地調査日誌抄

1993年 (平成5年)

5月12日 (木)	5月21日 (金)
写真撮影。器材搬入。調査区設定。	第1トレンチ精査。周辺踏査。
5月13日 (木)	5月24日 (月)
第1～4トレンチ表土掘り下げ。	第1～4トレンチ土層断面図作成。
5月19日 (水)	5月25日 (火)
第1トレンチ掘り下げ。地山検出。	埋め戻し。器材搬出。
5月20日 (木)	
第1～4トレンチ精査・写真撮影。平板測量。	

2 位置と環境

調査地は、榛原町の市街地の北方、標高約500mの鳥見山の中腹に位置する。この山裾周辺は宅地造成工事等の開発行為によって、年々、その環境が変化しているが、調査地周辺は、鳥見山自然公園や東海自然歩道等へ通じる林道が敷設された以外は、さほど大きな変化は認められない。調査地の下方、鳥見山の裾野には、南山古墳、清水谷遺跡、天ノ森遺跡、キトラ遺跡、谷畑古墳、神木坂古墳群、谷畑中世墓群などの縄文時代から中世にいたる重要な遺跡が点在している。

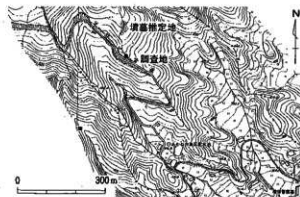


図4 岩尾火葬墓隣接地位置図

3 遺 跡 の 調 査

(1) 調査区と基本層序

遺構の有無が明確でなかったため、尾根稜線付近にトレンチを設定することとし、旧山道が通る尾根稜線上を第1トレンチ、尾根斜面を北から順に第2・3・4トレンチとした。

各トレンチとも腐食土及び淡茶色の表土を取り除くとすぐに地山を検出し、地表から地山面までの深さは約10~30cmとなっている。

(2) 検 出 遺 構

火葬墓等の遺構の検出につとめたが、土壌および木炭等は確認できなかった。

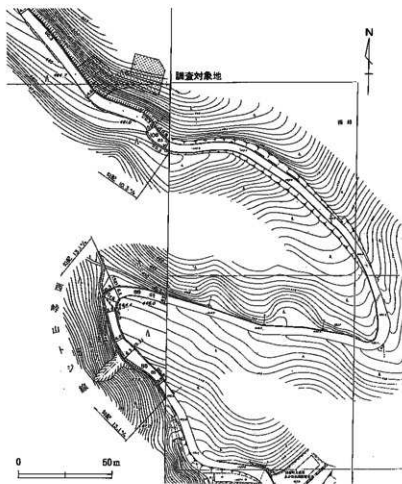


図5 岩尾火葬墓隣接地調査位置図(1)

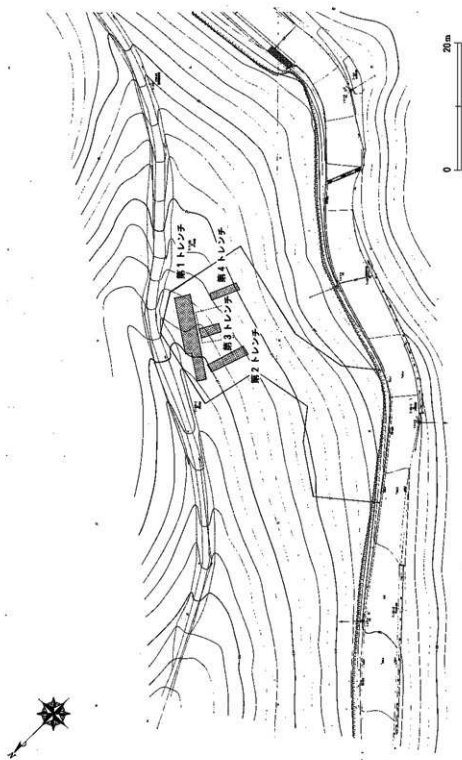


図6 岩尾火葬基隣接地調査位置図(2)

(3) 山土遺物

第1トレンチの中ほどの表土中から現存長10cm、幅3.5cm、厚さ2.1cmの砥石が出土している。研面の一面には縦書で「□□や兵七」と名前が刻まれている。近世以降の所産と推定される。

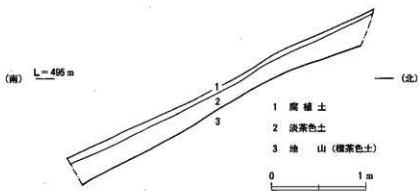


図7 岩尾火葬墓隣接地第3トレンチ土層断面図



図8 岩尾火葬墓隣接地出土遺物実測図

4 ま と め

当初、検出の可能性があった火葬墓（墓墳、木炭層等）は、確認できず、その他の遺構も認められなかった。出土遺物は、近世以降の砥石1点のみで、当初の目的とした奈良時代から平安時代の遺物は認められなかった。大正時代に発見された「岩尾火葬墓」は、今回の調査地よりさらに上方の尾根稜線と推定される。考古学史的にも著名であるこの墳墓の詳細な位置は、現段階では明らかにできず、今後も確認調査を重ねていく必要があるだろう。

5 抄 録

遺 跡 名 岩尾火葬墓隣接地
調 査 地 奈良県宇陀郡榛原町大字萩原2741-144（小字名：岩尾）
調査地立地 標高約500mの尾根上
時代・種別 奈良時代～平安時代の墳墓隣接地
調査主体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 社会教育課 技師 柳澤一宏）
調査原因 無線鉄塔および機械室建設（事業主体：関西セルラー電話株式会社）
現地調査期間 1993年5月12日～1993年5月25日
調査面積 約50㎡
検出遺構 明確な遺構は認められない
検出遺物 砥石1点
資料等の保管 榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1）森本六爾「我國に於ける鉄板出土遺跡」『考古学』第1巻第2号 東京考古学会 1930

註2）柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』榛原町教育委員会 1987

IV 篠楽向山古墳群発掘調査概要

1 調査の契機と経過

大宇陀町によって、大宇陀町野依から榛原町篠楽にかけて農道建設工事が計画・実施され、平成5年度から、篠楽向山古墳群がある榛原町側からも工事が開始されることとなったため、1993年(平成5年)6月22日～10月31日にかけて発掘調査を実施した。発掘調査は、工事範囲に含まれる1号墳、2号墳、8号墳のほか、墳丘裾部がその範囲に含まれる7号墳及び9号墳の一部を調査対象としている。なお、7号墳、9号墳の墳丘裾部は、その保存等の取り扱いについて協議を重ねているところである。

2 位置と環境

篠楽向山古墳群は、宇陀川と芳野川との合流地点にほど近い標高約320～350mの尾根上に立地し、東隣には大王山古墳群、西隣には篠楽アサマ遺跡(弥生時代後期～古墳時代後期の遺物散布地)が位置する。篠楽向山古墳群は、11基の古墳で構成され、うち1基は、1973年に奈良県立橿原考古学研究所によって発掘調査された5世紀中葉～後葉の「篠楽向山古墳」である。本来、この古墳を1号墳とすべきであろうが、今回の調査古墳を1号墳～9号墳とし、「篠楽向山古墳」とは呼称を区別している。

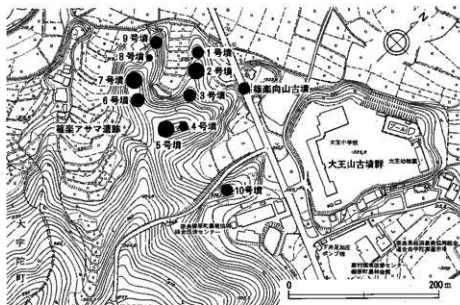


図9 篠楽向山古墳群分布図

3 遺 跡 の 調 査

篠栗向山1号墳

直径13m、高さ2mの円墳で、古墳の南北両側に掘割りを設ける。墳頂部中央より、やや南側に東西方向の割竹形木棺を安置する。その規模は墓壇長4.2m、墓壇幅1.6m、棺長2.55m、棺幅0.6mである。棺上から数個体分の須恵器杯身・杯蓋・高杯、土師器甕が破碎された状況で出土している。墓壇内東端からは須恵器杯身・杯蓋・高杯が各1点、棺内東端からは破損した鉄鏝が数本出土している。5世紀末葉から6世紀前葉の築造である。

篠栗向山1号墳下層土器棺

1号墳の埋葬施設東隣の下層に、地山を直径0.8~0.9mの円形に穿った土塊を検出した。内部には、口縁部を北にして、横性に置かれた弥生時代後期の甕をおさめる。土器内からの出土遺物は認められない。

篠栗向山2号墳

長径25m、短径20m、高さ2mの楕円形墳で古墳の南北両側に掘割りを設ける。墳頂部中央には2つの埋葬施設がそれぞれの主軸を東西方面にして設けられており、南側を第1埋葬施設、北側を第2埋葬施設としている。第1埋葬施設は、長さ4m、幅2.3mの墓壇内に2基の割竹形木棺が安置されている。1号棺は長さ2m、幅0.7mで、棺の両木口には粘土塊を置いている。棺内からは水晶製勾玉1点、水晶製算盤玉1点、碧玉製管玉20点、数本の鉄鏝及び鉄刀子等が出土している。2号棺の現状での規模は長さ1.6m、幅0.5mあり、棺内から土製丸玉42点、鉄鏝、鉄刀子が出土している。第2埋葬施設は長さ4.7m、幅2.1mの墓壇内に長さ3.1m、幅0.6mの割竹形木棺をおさめる。棺内からは碧玉製管玉25点以上、琥珀製瑠璃玉13点、ガラス小玉56点、土製丸玉96点、鉄刀、鉄鏝、鹿角製鉄刀子、棺外からは、棺西木口で須恵器杯身・杯蓋、棺東木口で須恵器提瓶・ミニチュア提瓶、土師器台付甕が出土している。墳頂部からは、須恵器杯蓋・甕等、墳丘裾部からは滑石製紡錘車や砥石等も出土している。6世紀前葉の築造である。

篠栗向山7号墳

墳丘裾の一部を調査したにすぎないが、須恵器、土師器が出土している。墳頂部には、浅い窪みが認められ、以前に須恵器甕片を採集している。

篠栗向山8号墳

調査前まで、古墳状隆起としていた地点である。明確な墳丘は認められないが、本来、直径約8m前後の円墳状を呈したものと推定される。埋葬施設は、東西方向に築かれ、長さ4.35m、幅1.2mの墓壇内に、長さ2.4m、幅0.7mの箱形木棺を安置する。棺内からは金盞、鉄鏝、棺外からは須恵器杯身・杯蓋が出土している。棺の東西両木口には、拳大から人頭大の石材を含んだ粘土塊を置く。6世紀中葉の築造である。

表3 篠楽向山古墳一覧表

名称	藤原町 遺跡地図番号	形状、規模等	埋葬施設	出土遺物	備考
篠楽向山 1号墳	2-219	円墳、径13m、高 さ2m、裾削り	割竹形木棺1	須恵器、土師器、鉄鏝、鉄刀子 他	1993年発掘調査・消滅
			(墳丘部分)	須恵器、黒色土器、瓦器、土師 器他	
			土器棺1(下層)	弥生土器	
篠楽向山 2号墳	2-220	楕円形墳、径20× 25m、高さ2m、 裾削り	第1埋葬施設 割竹形木棺1 (1号棺)	須恵器、土師器、鉄鏝、鉄刀子 勾玉、管玉、算盤玉	1993年発掘調査・消滅
			第1埋葬施設 割竹形木棺1 (2号棺)	丸玉	
			第2埋葬施設 割竹形木棺1	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏝、 鉄刀子、管玉、霰玉、丸玉	
			(墳丘部分)	須恵器、紡錘車、碓石他	
篠楽向山 3号墳	2-221	円墳、径15m、高 さ2m			未調査
篠楽向山 4号墳	2-212	円墳、径10m、高 さ1m			未調査
篠楽向山 5号墳	2-213	円墳、径18m、高 さ3m			未調査
篠楽向山 6号墳	2-215	円墳、径16m、高 さ3m			未調査
篠楽向山 7号墳	2-216	円墳、径16×18m、 高さ3m		須恵器、土師器他	1993年一部発掘調査
篠楽向山 8号墳	2-217	円墳?、径8m、 高さ1m	箱形木棺1	須恵器、金環、鉄鏝	1993年発掘調査・消滅
篠楽向山 9号墳	2-218	円墳、径15m、高 さ2m		須恵器、土師器他	1973年一部発掘調査
篠楽向山 古墳	2-209	円墳、径15m、高 さ1.8m	箱形木棺1	鏝、鉄刀、鉄鏝、鉄刀子、勾玉 管玉、弥生土器、サヌカイト他	1973年発掘調査・消滅

篠楽向山9号墳

掘削りの一部を検出しており、黒色土器、須恵器等の破片が出土している。

4 ま と め

篠楽向山古墳群は、以前に発掘調査が実施された大王山古墳群と広義の同一古墳群と考えられ、5世紀中葉～後葉に篠楽向山古墳を築造後、5世紀後葉から6世紀前葉にかけて篠楽向山1・2・7・9号墳を造築し、また、この頃、大王山古墳群でも造墓活動が開始される。大王山古墳群の盛期である6世紀前葉には、篠楽向山古墳群は、造墓活動は終焉をむかえ、大王山・篠楽向山古墳群の中心は、大王山古墳群へと移行している。遺物整理中のため、詳細な報告は後日、行う予定である。

5 抄 録

遺跡名	篠楽向山古墳群(1・2・7・8・9号墳)
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字篠楽41-2他(小字名:向山)
遺跡立地	標高約320m～約350mの尾根上
遺跡規模	円墳1基
時代・種別	古墳(5世紀後葉～6世紀中葉)
調査主体	榛原町教育委員会(教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 社会教育課 技師 柳澤一宏)
調査原因	農道建設工事(事業主体:大字陀町役場)
現地調査期間	1993年6月22日～1993年10月31日
調査面積	約820㎡
検出遺構	古墳5基、土器棺1基
出土遺物	サヌカイト、弥生土器、須恵器、土師器、勾玉、管玉、算盤玉、棗玉、丸玉、紡錘車、砥石、鉄刀、鉄銚、鉄刀子、金環、黒色土器ほか
	(整理箱 10箱)
資料等の保管	榛原町教育委員会(文化財整理室)

V 桧牧遺跡第3次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

桧牧遺跡は1972年(昭和47年)に、室生ダム建設に伴う発掘調査において確認された遺跡^{〔註1〕}である。その後、1992年度(平成4年度)に遺跡を含む河岸段丘及び丘陵斜面を利用した「平成榛原子供のもり公園事業」が計画され、河岸段丘を奈良県立橿原考古学研究所、丘陵斜面を榛原町教育委員会において、それぞれ発掘調査を担当することとなった。丘陵部分の現地調査は、1993年(平成5年)10月18日から1994年1月13日にかけて実施し、後述のとおり、多くの遺構・遺物を検出したので来年度において、その一部を本調査することとし、試掘調査を終えた。なお、便宜上、1972年の発掘調査を1次調査、1992年～1993年に奈良県立橿原考古学研究所が実施した発掘調査を2次調査、そして当委員会の発掘調査を3次調査としている。

2 位置と環境

桧牧遺跡は、榛原町の市街地の東方約2kmの宇陀川左岸に位置し、遺跡は標高約296m～300mの河岸段丘及び標高約300m～310mの丘陵斜面に広がる。河岸段丘は室生ダム内に含まれてはいるものの、水没することなく旧形を保っている。内牧川と合流した宇陀川本流域には確認されている遺跡は多くない。これまでに桧牧遺跡のほか、河合第I遺跡、河合第II遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代、中世の集落跡(遺物散布地)が確認されている。

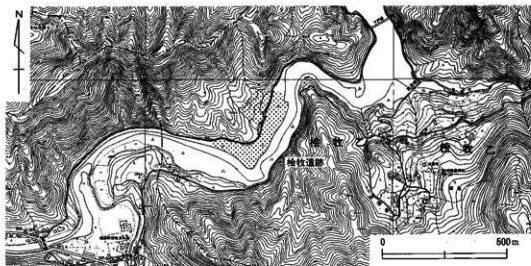


図10 桧牧遺跡位置図

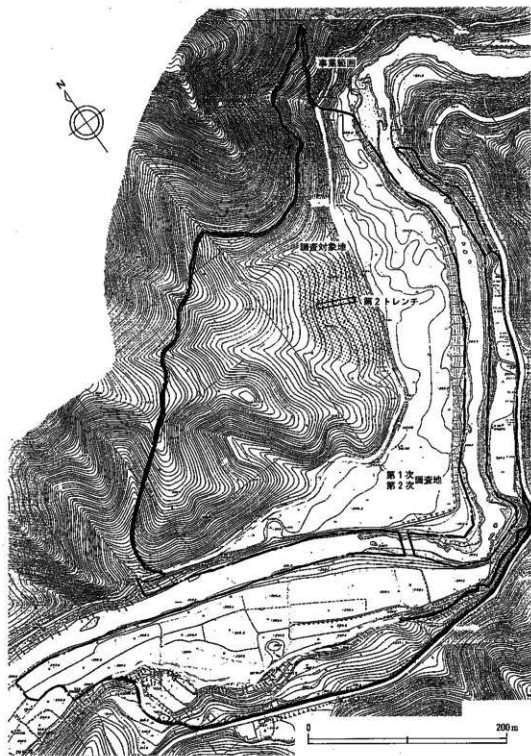


図11 松牧遺跡調査位置図

3 遺跡の調査

丘陵斜面を踏査したところ、その一部において緩傾斜（南北約50m、東西約40m）が認められ、その地区を調査対象地とし、適宜、5箇所にトレンチを設定した。そのうち、浅い谷地形に設定した第2トレンチに西半において平安時代から中世の遺構・遺物を比較的多く検出した。

遺構は土坑、ピット、石組等が認められ、さらにその範囲が広がることも予想される。遺物は弥生土器、サヌカイト片、須恵器、土師器、瓦器、鉄製品（釘、斧）、砥石などが出土している。

4 ま と め

松牧遺跡は、これまでの発掘調査から縄文時代早期から中世にいたる集落跡と考えられており、3次調査地からは、土坑、ピット、石組等の遺構と弥生土器、サヌカイト、須恵器、土師器、瓦器等の遺物を検出している。調査地周辺の土地利用の盛期は、先述のとおり平安時代から中世と考えられ、「松牧庄」との関連も推定できる。発掘調査中のため中間報告とし、詳述は後日としたい。

5 抄 録

遺跡名	松牧遺跡
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字松牧2107-4（小字名：川向イ）
遺跡立地	標高約300m～310mの丘陵斜面、標高約296m～300mの河岸段丘
遺跡規模	南北約350m、東西約200m
時代・種別	縄文時代～中世の集落跡
調査主体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 社会教育課 技師 柳澤一宏）
調査原因	公園造成工事（事業主体：榛原町役場）
現地調査期間	1993年10月18日～1994年1月13日
調査面積	約800㎡
検出遺構	土坑、ピット、石組ほか
出土遺物	サヌカイト、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、鉄製品、砥石ほか（整理箱 3箱）
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1） 小泉俊夫、久野邦雄『室生ダム水没地埋蔵文化財調査概報』奈良県教育委員会 1973

VI 山辺三マルズカ遺跡発掘調査概要

1 調査の契機と経過

(1) 調査の契機と経過

榛原町山辺三の室生ダム用地内に「美しいむらづくりモデル地区整備事業 ふれあい広場」の造成工事が計画された。この地区は「榛原町遺跡地図」に未記載ではあるものの、その面積が約1.5haと広範囲に及び、また、若干の遺物も採集したことから、「埋蔵文化財発掘届」の提出を求めた。平成5（1993）年5月13日付けで榛原町長から「埋蔵文化財発掘届」が提出され、関係機関が遺跡の取り扱い及び調査の実施方法等について協議を行ったところ、榛原町教育委員会において発掘調査を担当することとなった。発掘調査は、遺構・遺物の状況等を確認する試掘調査を行い、その状況によっては、改めて本調査を実施することとした。事務手続き等を経たのち、現地調査を1993年9月24日から1993年9月30日にかけて実施し、その後、1994年3月31日まで調査成果等の整理作業を行った。

調査関係者は次のとおりである。

調査主体 榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘）

調査担当課 榛原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）

庶務担当課 榛原町役場 産業建設部 産業課（課長 森塚 昇）

調査担当者 榛原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏

調査補助員 井上好美、山本美恵子、松田謙、出垣内径子、中島ヒデノ、松田美幸

調査作業員 池田ま子、池田チヨ子、中谷喜代子

調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課

(2) 現地調査日誌抄

1993年（平成5年）

9月24日（金）

写真撮影。器材搬入。第1トレンチ設定、土層断面精査。

9月27日（月）

第1トレンチ掘り下げ、精査。第2トレンチ設定。

9月28日（火）

第1トレンチ掘り下げ、精査。第2トレンチ掘り下げ、精査。

9月29日（水）

第1トレンチ・第2トレンチ写真撮影。

9月30日（木）

第1トレンチ・第2トレンチ精査、平板測量、土層断面図作成。器材搬出。

2 位置と環境

山辺三マルズカ遺跡は、榛原町の北東、室生村との境界にほど近い山間部に位置し、宇陀川へと灌ぐ天満川によって形成された東西約500m、南北約100mの谷部に立地する。事業地内での標高は西側の上流部で約299m、東側の下流部分で291mである。現在は、室生ダム用地に含まれる雑種地となっているが、以前は水田であった。

遺跡の北側には大和と伊勢とを結ぶ「おお越え道」が通り、現在、その役割は国道165号線や近鉄大阪線が担っている。事業地南東の山裾には、建長6年(1254)銘の地藏石仏(濡れ地藏)が刻まれている。石仏の下半は室生ダムによって水没しているが、潮水期等にその姿を見ることができる(写真1)。

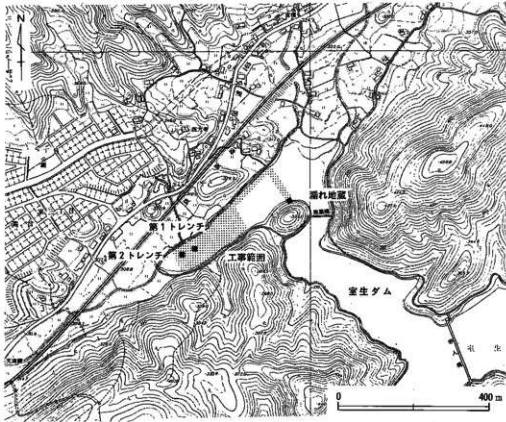


図12 山辺三マルズカ遺跡位置図

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

発掘調査は、比較的、湧水が少ないと予想された事業地の西端部分で行った。2箇所にトレンチを設定し、下流側（東側）を第1トレンチ、上流側（西側）を第2トレンチとした。

第1トレンチの基本層序は、上から順に砂・流土（1層）、旧水田土（2層）、橙茶色土（3層）、灰色粘土（4層）、暗灰色砂（5層）、明灰色砂（6層）、橙灰色砂礫（7層）となっている。現地表面から掘削面までの深さは約2.5mである。

第2トレンチの基本土層は、上から順に砂・流土（1層）、旧水田土（2層）、橙茶色土（3層）、灰色粘土（4層）、暗灰色砂（5層）、暗灰色粘土（6層）、明灰色砂（7層）となっている。現地表面から掘削面までの深さは約1.7mである。

(2) 検出遺構

明確な遺構は認められない。

(3) 出土遺物

第1トレンチの4～6層において古式土師器（高杯）、瓦器（椀）、土師器（皿）、陶器（甕）の各破片、第2トレンチの4層以下においてサヌカイト、弥生土器（壺）、古式土師器（壺）、須恵器（壺）、土師器（皿）、瓦器（椀）、瓦質土器（摺鉢）の各破片が整理箱1箱程度出土している。弥生土器は弥生時代後期、古式土師器は古墳時代前期、須恵器は奈良～平安時代、土師器・瓦器などは中世のものである。瓦器椀は、川越¹⁾編年の第Ⅱ段階B型式～第Ⅲ段階A型式、松本¹⁾編年の南SE-21下層期～井戸-20期に比定でき、12世紀中葉～13世紀中葉のものである。



写真2 山辺三マルズカ遺跡第1トレンチ



写真3 山辺三マルズカ遺跡第2トレンチ

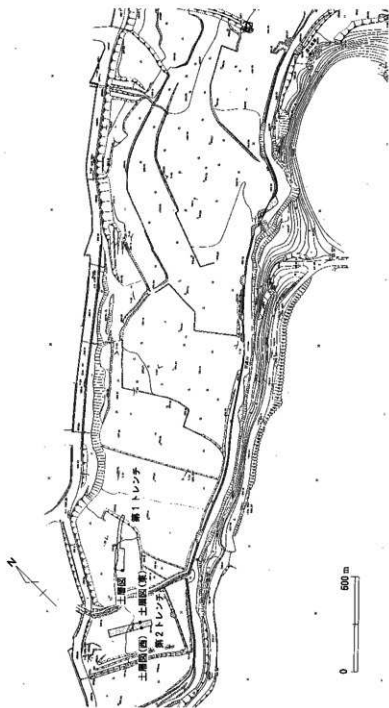


図13 山辺ニマルズカ遺跡調査位置図

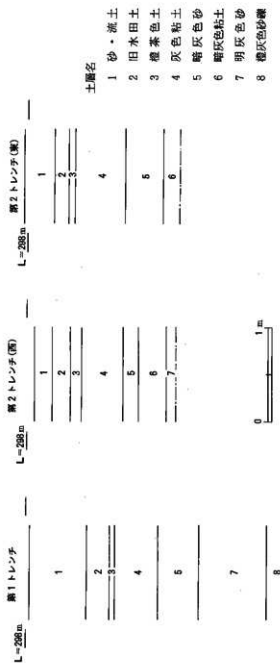


図14 山辺三マルズカ遺跡土層断面図

4 ま と め

調査地では、明確な遺構が認められず、湧水が著しいことから、天満川によって形成された氾濫原と考えられ、遺跡の中心は調査地の北側や西側の地域と推定される。公園造成工事という性格上、掘削等が比較的、地中深くまで及ばないため、発掘調査（試掘調査）は一部に留めている。遺物の出土量は多くないが、天満川流域で数少ない遺物散布地として、重要な位置を占めるものと考えられる。調査地北方の天満川の流域は、すでに大規模な宅地造成工事が実施され、詳細な遺跡の状況は明らかにできないが、赤瀬遺跡^{（註3）}などとの関係も注意しなければならない。

5 抄 録

遺 跡 名	山 ^マ 辺 ^ヘ ニマルズカ遺跡
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字山辺三317番地ほか（小字名：マルズカほか）
遺 跡 立 地	標高約290～305mの谷部
遺 跡 規 模	南北：約100m、東西：約500m、面積：約50000㎡
種 別・時 代	弥生時代～中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会（教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 社会教育課 技師 柳澤一宏）
調 査 原 因	農地造成工事（事業主体：榛原町役場）
現地調査期間	1993年9月24日～1993年9月30日
調 査 面 積	152㎡
検 出 遺 構	明確な遺構なし
検 出 遺 物	サマカイト、弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器 (整理箱 1箱)
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1) 川越俊一「大和地方出土の瓦器碗をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983

註2) 松本洋明他『十六面・薬王寺遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1988

註3) 柳澤一宏「赤瀬遺跡発掘調査概要報告書」榛原町教育委員会 1991

Ⅶ 丹切遺跡第5次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

(1) 調査の契機と経過

丹切遺跡は、縄文時代から中世にいたる遺物散布地で、奈良県遺跡地図番号15-B-8、橿原町遺跡地図番号1-98としているところである。遺跡の大半は過去の上地区画整理事業等に伴い住宅地等となっている。遺跡の西端部分において、店舗建設工事が計画されたため、事前協議を行い、1992年5月22日には埋蔵文化財発掘届が提出された。その後、関係機関等が遺跡の取り扱い及び発掘調査の実施方法等について協議を行ったところ、橿原町教育委員会が受託事業として発掘調査を実施することとなった。発掘調査に伴う事務手続等を経たのち、現地調査は1994年2月14日に着手し、同年2月28日に終了した。なお、丹切遺跡の発掘調査は、1985年の第1次調査以降、今回で第5次調査となる。

調査関係者は、次のとおりである。

- 調査主体 橿原町教育委員会（教育長 山尾正弘）
調査担当課 橿原町教育委員会 社会教育課（課長 奥田信雄）
調査担当者 橿原町教育委員会 社会教育課 技師 柳澤一宏
調査補助員 井上好美、山本美恵子、南信子、松田擁、田中知紀
調査作業員 池田圭子、池田チヨ子、中谷喜代子、小林マン、棚田幸子
調査指導 奈良県教育委員会 文化財保存課
調査協力 橿原サン開発株式会社



図15 丹切遺跡位置図

(2) 現地調査日誌抄

1994年(平成6年)

2月14日(月)

重機による掘り下げ作業。遺構検出作業。

2月28日(月)

地形測量。トレンチ埋め戻し作業。周辺踏査。

写真撮影。土層断面図作成。

2 位置と環境

調査地は、榛原の市街地の西端部にあたり、現在の宇陀川と芳野川との合流部分の北側に位置する。1949～1950年にかけて市街地周辺の宇陀川(旧宇陀川)の河川改修が行なわれ、新宇陀川(現在の宇陀川)が完成した。この河川改修によって丹切遺跡は南北に分断された格好となり、遺跡の北半部は、この頃から市街化が著しく進み、遺跡の様相は明らかにでない。

旧宇陀川は、今回の事業予定地内の西半部分で合流し、国道370号線に沿って榛原駅前へと流れており、今も随所にその面影を見ることができる。

事業予定地の標高は約306m～308mである。

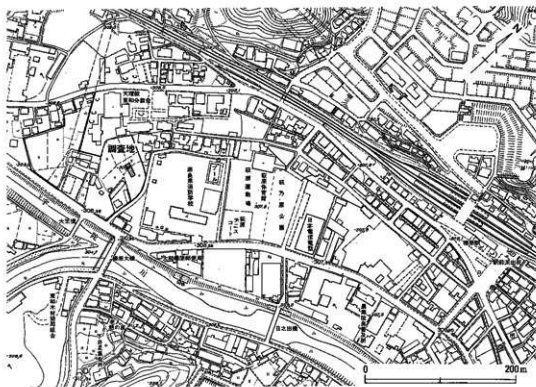


図16 丹切遺跡第5次調査位置図(1)

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

事業予定地（面積：13150㎡）のうち、西半部は、旧宇陀川跡に相当するため、東端部の比較的高い水田を調査対象地とした。東西方向にトレンチ（長さ20m、幅3.5m）を設定し、遺構・遺物の検出につとめた。

基本層序は第1層が耕作土（厚さ約30cm）、第2層がにぶい黄褐色土（厚さ約8cm）、第3層がやや砂質のにぶい黄褐色土（厚さ約30cm）、第4層がにぶい黄褐色粘質土（厚さ約15cm）、第5層が褐色粘質土（厚さ約10cm）、第6層が褐色砂質土（厚さ約20cm）第7層が明褐色砂礫である。

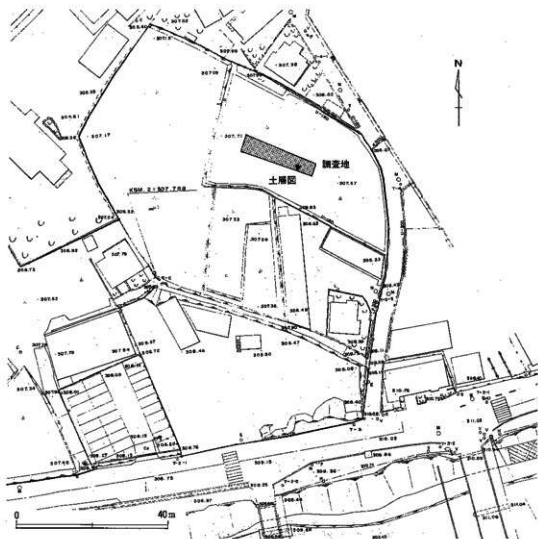


図17 丹切遺跡第5次調査位置図(2)

L = 308 m



- 1 耕作土-灰色粘質土-(7.5Y 5/1)
- 2 にぶい黄褐色土(10YR 5/3)
- 3 にぶい黄褐色土-やや砂質-(10YR 5/4)
- 4 にぶい黄褐色粘質土(10YR 5/3)
- 5 褐色粘質土(10YR 4/4)
- 6 褐色砂質土(10YR 4/4)
- 7 明褐色砂礫(7.5YR 5/6)

図18 丹切遺跡第5次調査土層断面図

(2) 検出遺構

明確な遺構は認められない。

(3) 出土遺物

第5層以下から黒色土器、瓦器、土師器、陶器、磁器の破片が若干出土しているが、細片が大半である。第7層の明褐色砂礫中から出土したものが比較的多い。



図19 丹切遺跡第5次調査
出土遺物実測図

黒色土器 椀

底部の一部の破片で、復元高台径は6.8cmである。内面は炭素吸着によって黒色、外面はにぶい黄橙色を呈する。内外面とも摩滅が著しい。細片のため詳細は明らかでないが、10世紀後葉から11世紀前葉の時期と考えられる。

4 ま と め

砂礫層中から平安時代～中世の土器片を若干検出したのみで、明確な遺構は認められない。調査地周辺は宇陀川・芳野川の氾濫原と推定される。

平安時代には萩原を中心とする地域は「萩原荘」^{註1)}の一部と考えられ、丹切遺跡は、この一部に含まれている。また、この遺跡は『日本書紀』に記載された「宇陀郡家」にかかわる遺跡とも推定^{註2)}されるが、現在までのところ、これらに伴うような遺構を明らかにできない。今後とも発掘調査を重ね、遺跡の実態を明らかにしていかなければならないと考えている。

5 抄 録

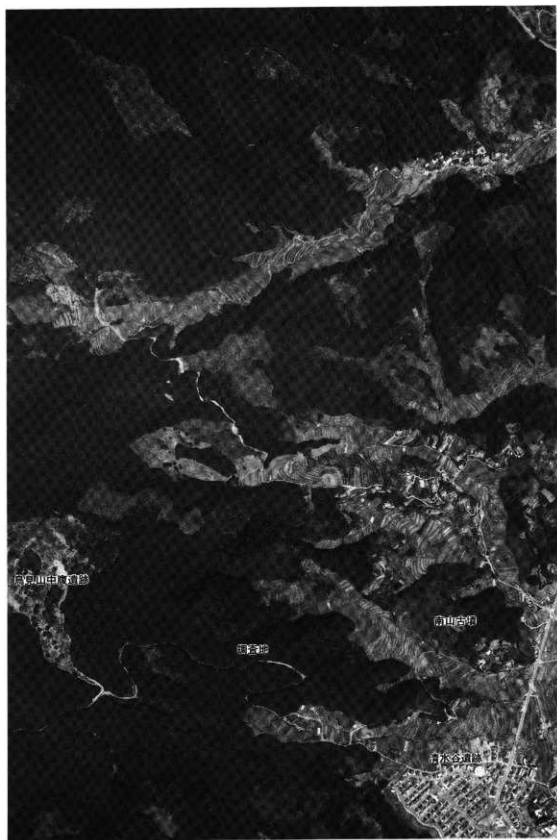
遺 跡 名 丹 切 遺 跡 (棟原町遺跡地図番号1-98、奈良県遺跡地図番号15-B-8)
調 査 地 奈良県宇陀郡棟原町大字下井足46-1、47番地ほか (小字名: 落合前)
遺 跡 立 地 標高約 306~330m尾根上・谷部・河岸段丘
遺 跡 規 模 南北約700~800m、東西約300~400m
時 代・種 別 縄文時代～中世の遺物散布地
調 査 主 体 棟原町教育委員会 (教育長 山尾正弘、社会教育課長 奥田信雄、調査担当者 社会教育課 技師 柳澤一宏)
調 査 原 因 店舗建設工事 (事業主体: 棟原サン開発株式会社)
現 地 調 査 期 間 1994年2月14日～1994年2月28日
調 査 面 積 70㎡
検 出 遺 構 なし
検 出 遺 物 黒色土器、瓦器、土師器、陶器、磁器 (整理箱1箱)
資 料 等 の 保 管 棟原町教育委員会 (文化財整理室)

註1) 『棟原町史』棟原町役場 1959

註2) 柳澤一宏『棟原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1992年度』棟原町教育委員会 1993

圖 版

図版一 岩尾火葬墓隣接地



航空写真（1981年撮影）



第1トレンチ (東から)



第2トレンチ (南から)



第3トレンチ (南から)



第4トレンチ (南から)

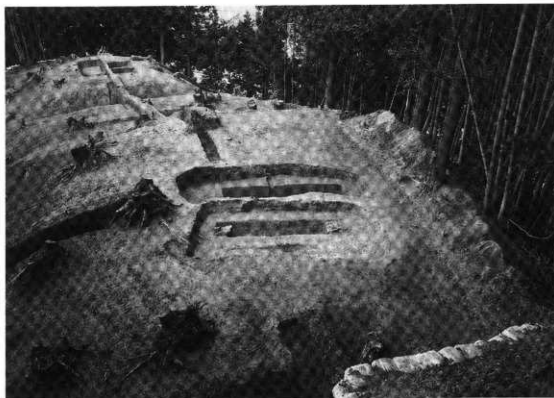


航空写真（1981年撮影）

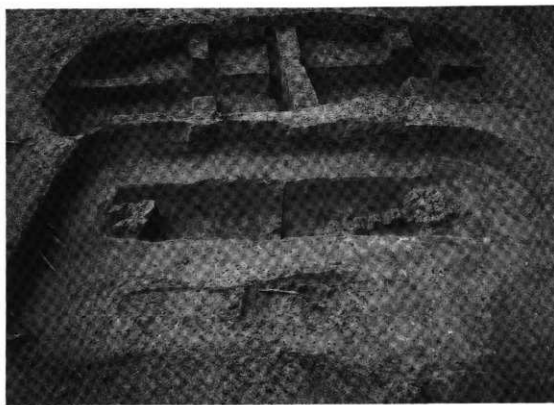
図版四 篠楽向山古墳群



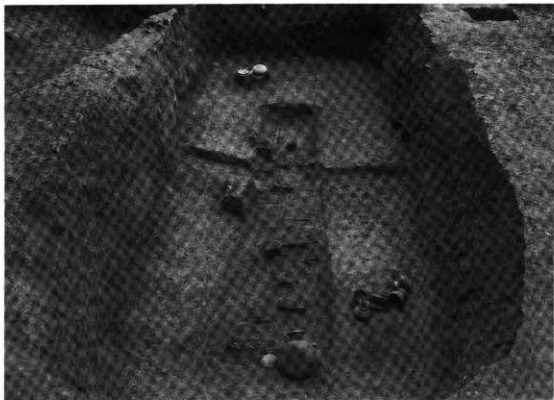
航空写真（1981年撮影）



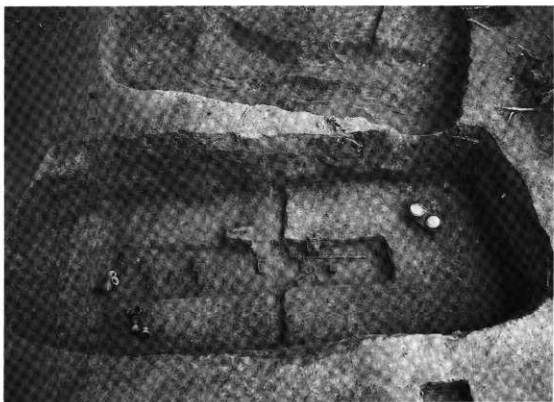
篠楽向山2号墳・1号墳（南から）



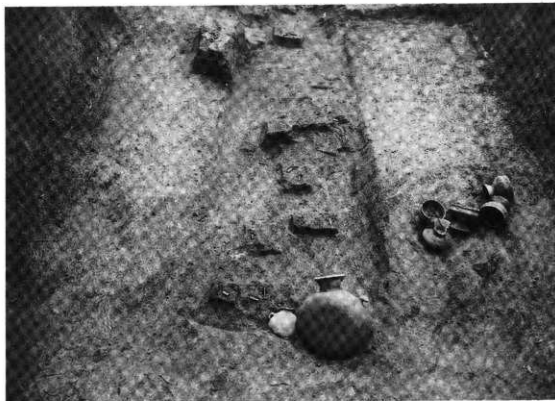
篠楽向山2号墳 第1埋葬施設（南から）



篠楽向山2号墳 第2埋葬施設（東から）



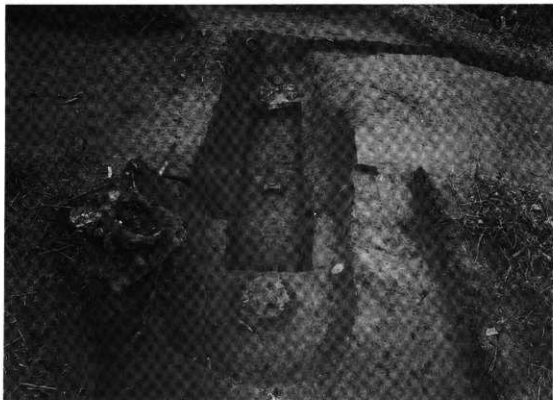
篠楽向山2号墳 第2埋葬施設（北から）



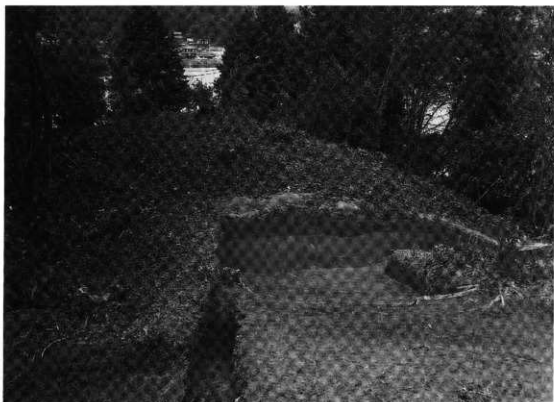
篠楽向山2号墳 第2埋葬施設一部分（東から）



篠楽向山7号墳 墳丘（北から）

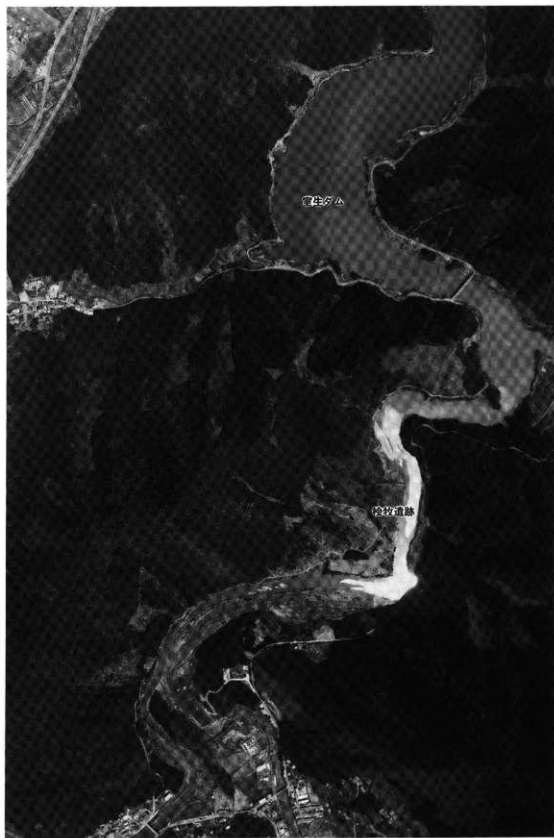


篠楽向山8号墳 埋葬施設（東から）

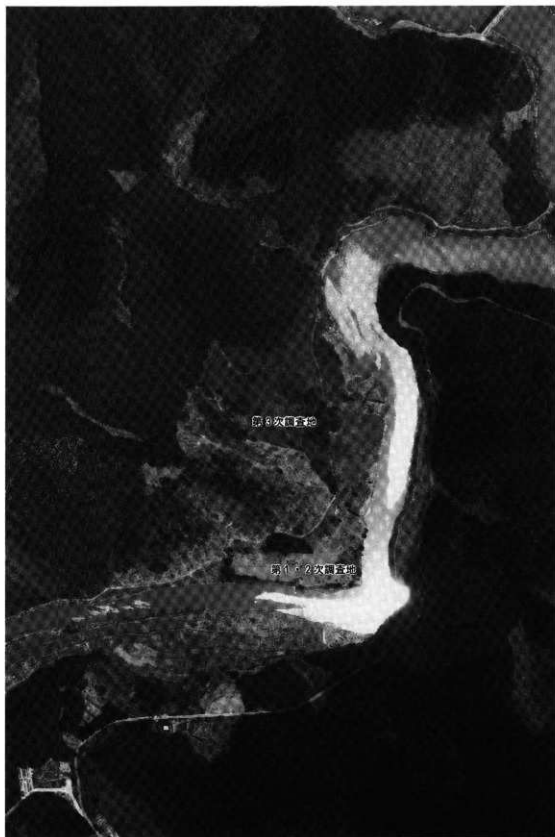


篠楽向山9号墳（南から）

図版九 桧牧遺跡



航空写真（1981年撮影）





航空写真（1981年撮影）





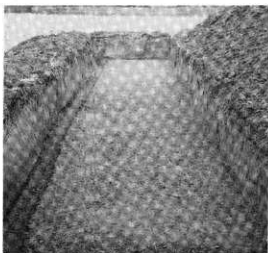
航空写真（1981年撮影）



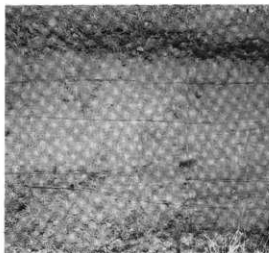
作業風景



作業風景



調査地（南東から）



調査地上層断面

榛原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1993年度

榛原町文化財調査概要 12

1994年3月31日 発行

編集
発行

榛原町教育委員会
奈良県宇陀郡榛原町萩原164番地

印刷

共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号